

<国語部会>

県研究主題

児童一人ひとりの言語活動を充実させ、「伝え合う力」の育成を重視した  
学習指導と評価の工夫・改善

提案1

提案者 川口 達徳 (湘南三浦地区)

子どもたちが主体的にかかわり合うための『書きこみ』『問題づくり』を用いた授業作り  
～『たぬきの糸車』(1年)の実践より～

1 提案内容

- (1) 「読む力を育てることは、自覚的に読むということ」  
“場面”の様子や描写に着目させ、読みの視点をもたせる。書きこみの実践。
- (2) 「教師と子どものやり取り」から、「子どもたち同士のかかわり合い」へ  
子どもから生まれた作品に対する疑問を、子どもたちの話し合いによる解決を通して、子どもたち同士がかかわり合い、意見を交換する場を設ける。

① 単元の見通しを立て、学習したことを振り返る。

毎授業の始めに本時のめあてを伝え、授業終了時には振り返りを行い、自分の成長や課題に気付け、次時へとつなげた。

② 書き込みの時間を設ける。

《各学年における書き込みの観点》

1・2年	3・4年	5・6年
<ul style="list-style-type: none"> <li>・わからないこと=斜線</li> <li>（言葉の意味 行動について 気持ちについて）</li> <li>・おもしろいと思うところ=波線 (登場人物の行動や表現)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・疑問</li> <li>・思ったこと・考えたこと</li> <li>・(登場人物の) 気持ち</li> <li>・(登場人物・場面の) 様子</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・疑問</li> <li>・思ったこと・考えたこと</li> <li>・(登場人物の) 心情</li> <li>・(登場人物・場面の) 様子</li> <li>・(作者の) 表現の工夫</li> </ul>

③ 問題作りをさせる。

「②書き込み」の中の、“わからないこと”についての書きこみを問題にして、クラスの中で話し合っていく。疑問の中でも、「言葉の意味について」「行動について」「気持ちについて」など、疑問の質の違うものを分けて話し合った。

④ 話し合い

クラスの座席を“コの字”型として、子どもたちがお互いに顔を見合わせて話し合いができるように場の設定を行った。

児童が出した“わからないこと”を拡大した本文に教師が線を引き、そこについての自分の考えを書いている児童に発表させ、話し合いを進めた。友だちと意見交換をさせながら、考えを深められるようにした。

⑤ 学習のまとめ

話し合いの後、登場人物になったつもりで、場面ごとの登場人物の気持ちを吹き出しに書かせた。各場面の読み取りを終えた後、読み手の立場から、たぬきに手紙を書く活動を取り入れた。

## 2 成果と課題

「たぬきの気持ちを読み取ろう」をクラスのめあてにしたことから、子どもたちは物語の展開を見失うことなく、各場面でたぬきの気持ちに迫りながら、読み進めることができた。また、一人ひとりがプリントに書きこむ時間をとったことで、文章の内容について考えをもてるようになっていった。子どもたちの疑問を出発点として話し合いを進めていった結果、自分の問題を解決していく喜びや友だちの問題を解決してあげる喜びを感じ、クラスの中にかかわり合いが生まれ、いくと同時に、登場人物の心情にも迫ることができた。

一方、授業の後半になってくると、話し合いのメンバーが決まってきてしまっていた。必要に応じて立ち戻ったり、想像しやすいように挿絵の生かし方や動作化などのタイミングを考えていきたい。また、授業の始めに書かせておいた「個人のめあて」の振り返りをきっちりとやっていきたい。

## 3 まとめ

「たぬきの糸車」は、学習の基礎・基本が含まれていて、かつ子どもたちが楽しんで読める教材である。昔の語り口、聞き慣れない言葉、情景の美しさ、くり返しのリズム、魅力的な登場人物（憎めない表情や行動、優しさ）などがふんだんにちりばめられているからである。

子どもたちからの疑問によって授業が進んでいくということは、話し合いがきっちりと行われている証拠であり、内容をより読み取らせたいのであれば、動作化を盛り込むことも効果的である。また、「書きこみ」は、読む目的を明確にしていったり、読む力をつけさせるためには必要不可欠で、主体的に学ぶための大切な個人的作業ともいえる。そこから、自分の思いや友だちとの考えの相違に気付いたり、言葉や文の意味の理解にもつながっていく。

また、「読む力」をつけるためには、音読も必須の要素といえる。自分の考えを深めるだけでなく、友だちの理解を助ける働きも担っている。音の響きやリズムに意識させ、自分の声を聞きながら理解したり、問題の解決の糸口とさえなることがある。そういった意味から、特に低学年では、音読に力を入れて指導を行っていく必要がある。

授業でよく行われる「話し合い」活動だが、それを行うときに、子どもに明確に「何のための活動なのか」というめあてを伝えておく必要がある。めあてのない話し合いでは、単にお互いの意見を言い合うだけで終わってしまったり、友だちの意見を参考にして自分の考えを深める、といった活動が行われなままになってしまったりすることがあるからである。

最後に、想像力をめいっぱい使って話しを広げていくことのできる物語では、他の教科のようにすべての謎を解いてすっきり終わりではなく、最後に新たな疑問を残して終わりにしてあげると、その先のストーリーを子どもたち一人ひとりが自由に思い描くことができる。また、どうしてそう思うのかを自然に友だちと話し合ったりする子どもも出てくるだろう。

何の力をつけさせるための活動なのか、めあてをはっきりさせて、めあてに基づいた年間指導計画、評価計画を立てていってもらいたい。

<p>&lt;研究主題&gt;</p> <p style="text-align: center;">確かな言葉の力を育てる国語教室 — 言語活動の充実を通して豊かな言葉の担い手を育てる —</p>
---

## 1 提案内容

「わたしは随筆家」パート2～わたしの心に残るこの人の言葉～」日常的言語活動を活かした実践より単元の学習と日常的な言語活動とが両輪のように働くことで、豊かな言葉の担い手が育つという考えから、日常的言語活動に取り組みつつ、年間を通して取り組む帯単元（4回のシリーズ）として随筆を書く単元を設定した。

## (1) 日常的な言語活動

- ① 文・詩と出会い人と出会う（わたしのお気に入りベスト5）
- ② 本と出会い人と出会う（部分or全文視写を通して書いて語ろう）
- ③ 青空教室（取材と執筆、教室外で感じよう）
- ④ スケッチ作文（見たものをそのまま自分の感じ方で書く）
- ⑤ ホットメモ（気づきメモ）
- ⑥ 随筆タイム（今日の随筆7月～）
- ⑦ 言葉タイム（思いや考えを「伝え合う」楽しみ）

## (2) 国語科における書く学習活動（年間を通して取り組む帯単元について）

- ① 「わたしは随筆家パートⅠ～自分～」（随筆との出会い）
  - ア たくさんの随筆作品に出会うようにした。
 

さくらももこ、長谷川町子、池田晶子さんらの作品、文詩集川崎54号「想像力」、35号「一つの出会い」、ハッピー新聞、日本文学にふれるために「枕草子」を読んだ。
  - イ 小手帳式の「ホットメモ」を使用し、見つけた題材を小まとめにメモする習慣をつけた。
- ② 「わたしは随筆家パートⅡ～私の心に残るこの人の言葉～」（読み手をひきつける工夫・効果）
  - ア 随筆を書く手がかりとして、何を書くか考える際に「構想表」を活用する。
 

構想表とは、取材したり、選材したりするためのものである。今の自分を見つめたときに、子どもたちは自分の心に留まる出来事、そのときの思いや考えがいくつか思い浮かぶ。それを言葉にして表の中に書いていく。表に書かれたいくつかの言葉を自分の思いにふさわしい言葉で書き換えたり、他の言葉に置き換えてみたりする。今の自分の心に最も留まるものに絞り込んで随筆に書きたいことを子どもたちは決めていく。
  - イ 表現の工夫については「心に残る人の語った言葉」「書き出し・結びの工夫」について考えさせたい。
- ③ 「わたしは随筆家パートⅢ～10年後のわたし～」（全体を通した文の構成）
  - ア 構想表に4段階のステップを用意し、起・承・転・結の構成を意識して書かせたいと考えた。
- ④ 「わたしは随筆家パートⅣ～12歳のわたし～」（交流 つながり）
  - ア 卒業期を迎えた12歳の自分を見つめて書き上げた作品をもとに、それを互いに読み合うことで生まれる互いの心のつながり・交流を大切にしたいと考える。

## 2 協議内容

- (1) 評価、指導事項について（年間を通して取り組む単元（シリーズ）が4つ設定されている。評価規準に設定された3つの観点（国語への関心・意欲・態度、書く能力、言語についての知識・理解・技能）を毎単元、それぞれみていくのか。（評価の仕方について。）  
→段階によって指導事項が1個の時も、2個の時もあり、異なる。どの指導事項が当てはまるのかも含め、評価の仕方については今後の課題としたい。
- (2) 子ども同士の交流について  
→「書くこと」を好きになること、子ども同士の交流については普段の言語活動を保障しないとイケない。国語だけではなく、例えば体育（ハードルを実践した後に、みんなで丸くなって意見を交流し合うなど）や社会や理科など他教科でも、どこでも言語活動を取り入れるようにしている。
- (3) 題材の重要性、ネタ探しについて  
→毎日ネタになるものを継続して書き留めておくことが大切。書きためたものが子どもの強みになる。
- (4) エッセイらしい文体を書くための指導の仕方について  
→個性、オリジナルに富む考え方が大切である。随筆は決まり事や制限がなく、自分の言葉で語る、自分の考えを自信をもってはっきりと語ることが大切である。また、リズムを大切にしたいと考える。また指導にあたっては、最初に伊集院静風、長谷川町子風、さくらももこ風と3つのパターンで指導した。ゲーム的な感じで書き方を学ぶことができるため、楽しく取り組むことができた。

## 3 まとめ

- (1) 実践の価値について
  - ア 目の前の子どもと照らし合わせて、目の前の子どもに寄り添って学習が進んでいるところにこの実践の価値がある。
  - イ つけたい力が明確になっている。始めに教科書ありきではなく、つけたい力を明確にした上で随筆を選んでいる。
  - ウ 単元の学習と日常的な言語活動とが両輪のように働くことで豊かな言葉の担い手が育つ。授業時間以外でも日常的に言語感覚を磨くことが言葉の力をつけることにつながる。
- (2) 書く力を育てるために  
もっている知識、技能を出さないとできない「書くこと」は力のつく学習である。
  - ア 書きならせるための工夫がある（ホットメモの活用など）
  - イ 書きたくなるしかけがある（書いたことが何のためにどうなるか明確になっている）
  - ウ 学習過程が明確化されている（モデル文の提示が明確。何となくのゴールが分かる、具体的な手立てが分かることがよい）といったことが大切なポイントである。
- (3) 随筆の扱い方  
「随筆とは、自由な形式で自由にテーマを選んで書くことのできる、思いのままに綴る文である。今回、「心に残るこの人の言葉」という少し高いハードルを設定することによって、自分を見つめ直すきっかけとなったのではないかと考える。